日本でも最も古くからのチェチェン支援者の一人である、ＤＥＮ（能と狂言の雑誌）発行人の渡辺紀子さんが、二〇〇七年四月に逝去されました。渡辺さんは、一九九六年の、チェチェン戦争が始まった当初から、寺沢潤世さん（日本山妙法寺僧侶）の、日本でのコンタクトパーソンを務めておられました。

九九年より、病気と闘いつつＤＥＮを発行されていたため、渡辺さんが運動の表舞台に立たれることは多くありませんでしたが、雑誌はもとより、二〇〇〇年春のロシア大使館前での抗議行動の際の姿や、「ユーラシア紛争地特別フォーラム」の支援者として、ご記憶の方も多いかと思います。

この文章は、寺沢さんがご遺族と関係者に宛てたお手紙です。ご遺族の了承を得て、公開いたします。渡辺紀子さんのご冥福を、心よりお祈り申し上げます。（大富亮／チェチェンニュース発行人　二〇〇七年六月二八日）

南無妙法蓮華経

あまりにも急な知らせでした。

ユーラシア大陸を果てしなく旅する雲水の耳にその風の知らせが届いた時には、もう三七日が過ぎていました。思えば内にはげしさを秘めながら、ひかえめに、しかしきっぱりと自らの道を歩みつつ、出会いの一人一人に和していく渡辺さんらしいお別れでした。

ＤＥＮの編集に打ち込んでいた最後の幾年間はきっと燃えるような激しい戦いだったのではないでしょうか。

その頃年に一度か二度、帰国したおりお会いする渡辺さんには、そのような面影の片鱗をもうかがうことができませんでした。しかしそのたびにいただいた幾冊かのＤＥＮは、世界行脚の旅上の私にとっては、他のどんな日本の書籍にもまして、美しい日本のことばとこころの滋養となりました。今にして、それは渡辺さんの命の声がこめられていたことを思い知ります。

二十世紀の最後の十年、ベルリンの壁の崩壊、湾岸戦争、ソ連消滅という新世紀とともに始まる世界的動乱の幕開けのただなかを生きてきた私は、その頃日本に戻っても身のよるべもなく、世界と日本のゆく末を憂うる想いを、誰に告ぐる知己もなく、暗澹とした独居の日々を送っていました。

九五年、ソ連消滅後の新生ロシアは、独立を宣言したコーカサスの小国チェチェンに軍事侵攻しました。ポスト冷戦のユーラシア世界の運命が大きく暗転してゆく岐路でした。

すさまじい首都グロズヌイの絨毯爆撃とヨーロッパ近代戦争史にも類のない激烈な白昼戦がたたかわれるさなか、モスクワからチェチェンの戦場にむかった「命を慈しむ母たちの行進」を唱導し、そこでチェチェンの村々の惨状をつぶさに思い知った私は、なんとしてもそこに生きる人々の心からの平和の祈りと叫びを世界に伝えようと、まず日本に向かいました。

しばし身を寄せた東京・大森の寓居で、刻々と戦われているチェチェンの村々に想いをよせると、いてもたってもおれない無念さに涙しました。そんな暗澹たる日々、たまたま大森の家にたずねてこられたのが、渡辺さんでした。はじめてお会いした渡辺さんは、はきだすようにものがたる私のすさまじいチェチェン体験をたちどころにうけとめ、それをレポートにまとめて週刊金曜日に発表してくださいました。チェチェン戦争当初の戦場のありのままの姿が、この戦争と直接に関わった普通の市民と宗教者の非暴力の行動を通して語られた、世界的にもはじめてのチェチェン戦争のレポートでした。

さらに渡辺さんは、ポストソビエトのユーラシア世界に起きつつある陰惨きわまりないチェチェン戦争の深層に流れる、われわれの文明そのものの重大な変遷を俯瞰すべく、このような運命と一体に動いてきた私の半生をまとめようと決意されました。

混沌の様相を深めるロシアに旅立つ直前の大森の寓居で三日三晩にわたってとぎれることなく語られた私の半生を、渡辺さんは「天に轟け、地に潤せ」(地湧社 一九九六年)という本にまとめて上梓されました。不思議としかいいようのない関わりのなかで、今ふりかえっても大変な時代の大変な出会いから生まれた、それは渡辺さんが一身にひきうけられた辛苦の結晶であったのです。それから幾年かのあいだ、激しく揺れ動くユーラシア世界を旅しつづける私がなんとか日本語世界につながることができたのは、ひとえに渡辺さんの人知れぬご助力によっています。

今度渡辺さんを偲ぶ集いが開かれることを知ったのは、もう日本を発つ直前のことでした。中国に向かう海上で、そして今、遼東半島にある美しい千山の山奥で、この一文を草しながら思い出される渡辺さんは、いつもしずかでおくゆかしい方でした。

しかし今にしてその実なんと強くはげしい情熱を秘めておられたのかと感をあらたにします。だれもあえてなしえない事を自らに課し、それを平然とそして淡々とやってのける方でした。

私は渡辺さんのうちこまれた書や芸能の世界からは遠くはなれた門外漢ですが、今渡辺さんの一生そのものにこそ、渾身をもって書き切った書や、まさに舞い終えた能の後ににじむ余韻の深さからたちのぼる香気につつまれたような感銘にうたれています。

私は今年の冬、病母のそばにあるため、出家して以来実に三十幾年ぶりにふるさと能登の羽咋の実家で一人長い日々を過ごしました。この時渡辺さんがわざわざ羽咋の実家に一人住む母をたずね、日本海の打ち寄せる千里浜のなぎさに立たれたことも思い出し、日本の今、アジアそして世界の運命に、思いを寄せました。

人は一生の間に、想いの深さをどれだけ言葉にできるものでしょう。しかし、きっと語られなかった想いの深さこそが心から心に伝わってゆくものなのでしょう。人間の希望をそこにかけます。どうか、生死を越えた永遠の私の祈りを受けとってください。合掌

二〇〇七年六月吉日

中央アジアに向かう途上の中国千山にて

寺沢潤世

南無妙法蓮華経

所やなぎ様

+86-135-22777975　（六月二九日まで）

+86-159-2241429　（六月二九日以降）